

近江商人の知恵と理念を現代に生かす情報紙

さん ぽ う

三方よし

第49号
2022/9

近江商人郷土館内部

近江商人小林吟右衛門家の屋敷は、昭和54年（1979）財団法人近江商人郷土館として公開され、古文書・商用具・家具が陳列されている。財団では、これら史資料が幕藩制社会から近代日本社会への変革期における商人の商業活動や生活様式への理解と研究の一助となることを願っている。



かつて、新入社員教育の教材として多くの企業で使われた「てんびんの詩」^{うた}は、江頭恒治著『江州商人』の中に記されたわずかなエピソードから誕生したといわれる。その映画の主要な撮影現場となったのが、丁子屋小林吟右衛門家の本宅であった。東近江市小田町の1000坪の敷地は、昭和54年（1979）に財団法人近江商人郷土館として公開された。本宅であった生活館と蔵を改修した資料館には、商い道具や生活に使われていた調度品がそのまま展示され、近江商人の商家の商いと暮らしの様子が手に取るように感じられる。

7月23日、近江商人郷土館の館長末永國紀さんから小林家と彦根藩のめぐりのご講演をお聞きました。

CONTENTS

特集：丁子屋小林吟右衛門（丁吟）と彦根藩……………	2
・講演 丁子屋小林吟右衛門の系譜と彦根藩 近江商人郷土館館長 末永國紀氏	
・井伊家の菩提寺 龍潭寺と清凉寺	
「おはなし近江商人」完成……………	11
創立20周年記念事業のご案内……………	12

講演

丁子屋小林吟右衛門(丁吟)と彦根藩

2022年7月23日(土) (財)近江商人郷土館にて



近江商人郷土館館長

末永 國紀氏

1943年福岡県生まれ、佐賀県出身。同志社大学大学院経済学研究科修了。
同大学教授を経て同志社大学名誉教授。財団法人近江商人郷土館館長

末永館長が、小林吟右衛門家で調査を始めたのは、大学院生の時からで、もう50年以上になるという。当時は、本家の商家のつくりで、ここに寝泊まりしながら古文書をずっと解読されていた。三方よし講座では、丁子屋小林吟右衛門家の系譜とともに特に、彦根藩との関係について話を進めていただいた。

小林吟右衛門家の商号は「チョーギン丁吟」と言い、創業されたのは寛政10年(1798)で、丁吟が活躍した時代は幕末維新期の動乱の時期だ。ペリー来航(1853年)から幕末動乱期が始まり、安政の大地震、安政のコレラの流行、桜田門外の変、和宮下向、両替商の倒産や天誅の激化、禁門の変(蛤御門の変)、それから、ええじゃないか踊りという狂乱の時代であった。

丁吟について

丁吟の創業と出店

初代と二代目吟右衛門は、創業後30年ほど経過した天保2年(1831)には、江戸の日本橋、堀留町に織物問屋を開業、その後天保13年(1842)には京都六角柳馬場に呉服問屋を出店、文久元年(1861)には大坂安土町2丁目で両替店を開いており、江戸、京都、大坂、三都に出店を開いています。

この家の特徴の一つは、委託販売という方式を取り入れたということです。初代と2代にわたり天秤棒を担いで、委託販売を行い天保2年(1831)に、江戸日本橋堀留に織物問屋を開くことができました。商いを始めて30年ちよつとで江戸に出店するには、そう簡単ではないはずですが委託販売を行ったことで可能としたのです。

丁吟という家のポジションは18世紀前半の近江商人の番付(写真14)で確認できますが一番上段に位置しています。一方、当時の商いの様子の描かれたものがあります(写真4)これは、明治になってから先祖の姿を絵姿にとどめておきたいと掛

け軸にした行商の姿です。わずかに二人で、いまでも石畳が残っていると思われる箱根を歩いている様子ですが、二人とも商品はもっていない。商品は船だとか牛馬車を使ったり、あるいは飛脚を使ったりして別に送り、送り込んだ荷物を庄屋だとかお寺とか旅籠とか神社で、地元の商人を集めて売買する卸売です。小売ではないということがポイントの一つです。だからこそ、身軽な格好で旅ができたのです。

「金銭萬覚帳」に見る

小林家の商い

小林家に残る「金銭萬覚帳」は、行商を始めた当初から明治元年(1866)までの記録が克明に記載され、この帳面の記録によって、委託販売をやっていたということが分かりました。

この時代の委託というのは、自分の方から話を持ち掛けて商品を委託したのですが、取引がだんだん長期になってくると、委託した先の業者が、今度はこういう商品を送ってくれと、送り荷というかたちで商品を入れるようになり、それだけに規模が大きくなり、商品の量も多く、



写真3 初代小林吟右衛門
(1796-1854)



写真5 丁子屋の屋号が入る薬の看板。初期の商いでは薬を扱っていた。

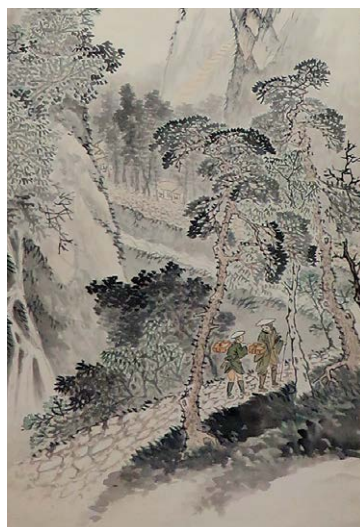


写真4 初代の創業時の様子を描いた「函嶺行姿」菅原元道画



写真2 郷里の本宅において当主は、常に営業の統括を行っており、隠居後も人の出入りする様子を座敷蔵(隠居蔵)の窓から見聞することで把握していた。

利益も上がっていったのです。だからこそ創業後30年で江戸のど真ん中、日本橋に店を開くことができたのです。単なる天秤棒商いだけではなく、卸売であり、委託販売をしていたのです。初代は78歳で亡くなったのですが、亡くなる3カ月前に、矢尾喜兵衛に会っています。矢尾喜兵衛は日野出身の近江商人で、埼玉県秩父に出店を開いていますが、丁吟に江戸為替を頼みにきたのです。この時の様子を喜兵衛さんは、『見聞随筆』という自分のエッセー集の中に書いておいてくれました。

「天秤棒の商人より出世いたし、大身代になるといふ、そのような目当てはほど遠いことにて、思いて益なし。欲といえども欲にてもあらず。ただわれらごとき細元手の小商人は、人々の力を借りてこんにちの渡世もするものなり。実意にあらざれば

人々力を添えることなし。いかにも他人方へ不義理いたさぬよう、人に損失かけぬようにと、この心得第一とするときは、われら身体を働き苦しめることを厭うことなし。わが身を責め、骨を折り苦しむときは、人またこれを憐れむゆえ、何ほどの身代を望むということにあらざれども、恵みをもつて、おいおい立身に及ぶものなり。しかれども、運ということも、まったくあることにて、世に言う因縁のよいということも、いたって大事なことにて候」

なかなか含蓄のある言葉だと思いますが、要するに、「天秤棒を担いで暮らしを立てていかなければいけないような小商人の者であっても、まず他人への不義理をしないように、損失をかけないようにということを考えながら自分が一生懸命働けば、その働く姿勢というのは周囲の人たちに評価してもらって、いつの間にか身代を築くことができる、財産を築くことができる」と言っているのです。

しかしながら、「世の中には運ということも大事なんだ」とも付け加えています。商いというのは、世の中の一員である、社会の一員であるという意識を小

商人の段階から持っていたということですね。

小林家の家訓 「示合之条目」

小林家には嘉永年間につくられた「示合之条目」という一種の家訓がありますが、この中に押込隠居の規定があります。最初から6行目ぐらいに、

「主人たりとも右当がい入用あいつけ候上は、その他に立替金があった場合は、それは主人の借金だ」と書いてあります。

そして、主人がもし不法不埒の沙汰があった場合においては、「主人の持っている所持の品だけではなくて手回り品までも取り上げて、親類と後見人が集まって立ち会いの上、隠居を申し付くべきこと」と書いてあります。

つまり、押込隠居にするということは家訓の中できちんと規定されているのです。このように家訓には、非常に厳しい条文も含まれています。

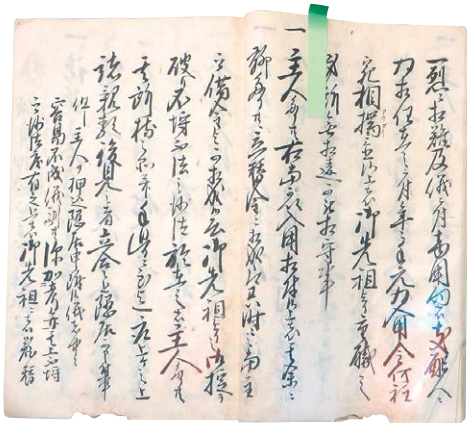


写真8 「示合之条目」に記載されている押し込み隠居の規定の部分

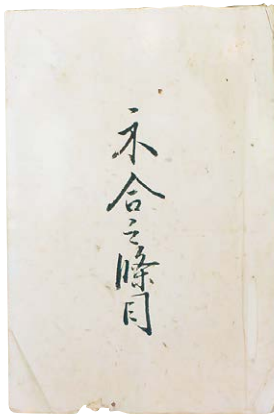


写真7 小林家家訓「示合之条目」



写真6 丁吟の印半纏

彦根藩の御用達商としての丁吟

献金と調達金

丁吟は、領主であった彦根藩とは御用達商という関係にありました。他の近江商人の場合はいろんな大名家と金銭の貸借関係があったのですが、この丁吟に関しては彦根藩に深く入り込んで、彦根藩一本と言ってもいいくらいです。

丁吟の彦根藩への献金の状況は、天保7年(1836)から元治元年(1864)まで、貸付金ではなく、差し上げたのが6700両になります。その見返りとして扶持をもらったり、苗字をもらったり、あるいは掛け軸をもらったりしています。(写真9・12)

井伊家の江戸桜田の上屋敷が炎上した時には、その見舞金を出していますし、桜田門外の変のときには10000両を献金し、禁門の変(蛤御門の変ともいう)の場合は見舞金として700両を渡しているなど、彦根藩への渡し金が6700両になっています。

このように関係の深かった彦根藩が、丁吟に対しての借金がどれくらいあったかといえます

と、天保12年(1841)12月から明治4年(1871)7月までの間、金2万7935両と銀36貫600匁ありました。

このうち明治維新政府によって肩代わりされたのが2万6505両です。彦根藩との関わった時期が非常に短かったから、ずいぶん助かっています。幕末期には、大名は借金に苦しみ首が回らなかったのを、明治政府が全部、借金の時期によって旧公債とか新公債というようなかたちに分けて肩代わりし、社会的には華族という特別な存在を認めたのですから経済的には、大名たちにとっては非常に助かったものです。丁吟の場合は、公債のかたちで返済してもらったのが2万6505両でした。

藩政業務の手伝い

丁吟は、元方勘定所の付属です。すから、財務を担当する彦根藩の役所に安政3年に6450両、万延元年に8150両、文久3年には1万8150両を貸し付けています。

藩の機関だけではなく、藩主に對しても、彦根藩の侍に對しても、金貨銀貨の出し入れに

じています。井伊直弼の一番の側近であった宇津木六之丞に對して、1年半ぐらいの間に2645両を預かって400両を貸出しているという書状が残っています。丁吟は、江戸と京都の両方に出店があったので、出店を通じてお金の出し入れができるという便利ながあったのです。2代目の吟右衛門も出店の店員に對して「宇津木六之丞からの要求があったときには、そのとおりにしなさい」という指示する手紙が残っています。

井伊直弼お泊りの本陣に

「御殿様御巡郷 御本陣記録」には嘉永5年(1852)、当主になった井伊直弼が領内を巡視して回った時に小林家に泊まったことが記されています。小林家が本陣になったのでその時、別棟を建てました。現存していますが、門も新しくつくって直弼を迎へ、2000両を献金しています。その代わりに30人扶持をもらったのです。扶持というのは、1人1日、米5合を一年間支給するということで、それを一人扶持といっています。

この時には、供回りの人に対する食事提供もしていますが、彦根藩庁から、一汁一菜してくれという布達が出ていたので



写真9 井伊家拝領の品々が展示されている企画展示室



写真12 井伊家より拝領の黒地裕江山水時絵平卓

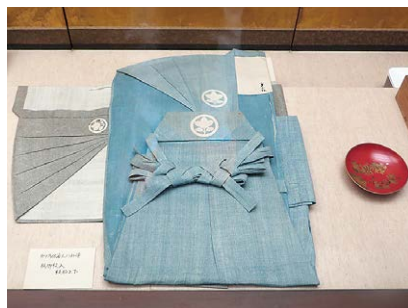


写真11 井伊家拝領の袴



写真10 吟右衛門は苗字帯刀を許されている。後ろは狩野山楽の屏風。いずれも拝領品

幕府は鎖国をやめ、開港して欧米との海外貿易が開始されました。来航したハリスとの間でいろいろなやりとりがあり、安政5年(1858)6月19日に「日米修好通商条約」が調印されました。この条約は、要するに勅許を得なかったということで、後々国内の対立になっていくわけですが、この貿易が始まったことによって、日本は世界経済の動乱の中に巻き込まれていきます。

そのときの最初の輸出品は、日本の金貨でした。国内の金銀の交換比率が、天保小判1両が天保一分銀4枚でした。これが、そもそも間違いのもとで、天保一分銀という薄っぺらい貨幣4枚で、天保小判という金貨が交換されていました。日本国内では、天保一分銀というのは銀が3分の1しか含まれていないので全然価値はありません、それを一分として通用させていたのです。

この1ドル銀貨は、一分銀貨の3倍の銀を含んでいたのです。幕府の役人は、通用力からいえばこの一分銀貨と1ドル銀貨一枚が等価だと言い張ったんですが、ハリスにしてみれば理解できなかったのです。

そのときの正月に丁吟が集めた金貨は、天保小判8857両、つまり8857枚です。天保一分金が2165両、4分で1両ですから、小判の枚数からすれば、これを4倍すると8660枚になります。割増通用令によって、丁吟は差益の2万5906両を得たのです。万延元年の金貨投機の結果として、丁吟の純資産は14万両を超えるものになり、2年前の時期から、いきなり倍加しました。こうした金貨改鑄情報は、彦根藩からのものです。この時外人だけではなく、日本の商人も金貨を買いあさったのです。

開港の波紋、 金貨流出の仕組み

彦根藩からの情報としての金貨改鑄

彦根藩から一汁七菜を用意しています。一汁一菜どころではない、すごい高価な、豪華な接待だったと思います。

このときの献立の詳細も資料館に展示していますが、こうした行為に対して彦根藩からいろいろな拝領品が渡されています。

くる。そして日本国内で天保一分銀に換えて、さらにまた天保小判に換えると75枚になったのです。この天保小判の金貨75枚を海外に持ち出すと、1ドル銀貨300枚に引き替えられたのです。だから彼らは必死になって日本の金貨を買い集めて輸出したので、金貨が流出したということなのです。

この対策として、幕府は「金貨改鑄令」を發布しました。旧来の金銀貨幣を集めて鑄造し直す時間はないので、安政7年、つまり万延元(1860)年の1月21日付で「金貨改鑄令」を發布したので。

そのときの正月に丁吟が集めた金貨は、天保小判8857両、つまり8857枚です。天保一分金が2165両、4分で1両ですから、小判の枚数からすれば、これを4倍すると8660枚になります。割増通用令によって、丁吟は差益の2万5906両を得たのです。万延元年の金貨投機の結果として、丁吟の純資産は14万両を超えるものになり、2年前の時期から、いきなり倍加しました。こうした金貨改鑄情報は、彦根藩からのものです。この時外人だけではなく、日本の商人も金貨を買いあさったのです。

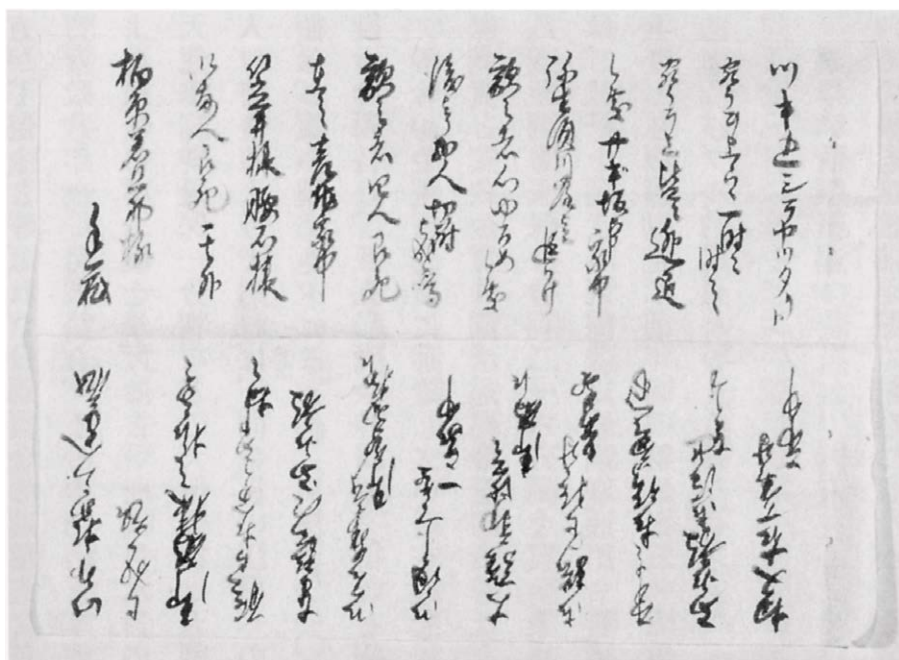


写真13 桜田門外の変の急報(財近江商人郷土館蔵)

江戸店から京店に届いた桜田門外の変の急報。彦根藩より約半日早く届き、事件の描写を迫真的に記している。

急報の内容

お駕籠のなかへ抜き身三本ばかりつきこみ、「シテヤツタリと声を上げ」と述べ、大老直弼の生死は不明としながらも、その身に重大な異変の生じたことを伝えている。彦根藩側のおよその死傷者の名前を知らせるとともに、江戸藩邸の大騒動の様子が語られ、文末では、当分の間の営業自粛を建言している。

(「近江商人と三方よし」モラロジー研究所発行より)

桜田門外の変

急報のスピードと内容

その後、最初に起きたのが桜田門外の変です。万延元年(1860)3月3日、現在の暦では3月24日ぐらい、そのとき大雪が降り、雪の朝の惨劇になりました。この事変の急報を丁吟の江戸店から京店へ、そして、この小田荊へ送ったのですが、それが非常に速かったのです。

当時の様子がかわら版に正確に描かれています。桜田門外の変のとき、討ち入ってきた侍たちは先頭の方に「申し上げます」と訴え出ます。これは、駕籠訴といひ、駕籠に乗った大名に訴えることです。駕籠訴があると、供回りや、駕籠回りの人たちが、先頭へ行ってしまうので、駕籠の回りが、手薄になります。訴え出た連中は、訴状とピストルを持っていて、いきなり

駕籠をめがけてピストルを撃った。そしてその弾丸が井伊直弼の股間に当たったので、直弼は駕籠から出られなかったのです。がら空きになったのを見て左右から討ち込んできたりして、乱闘になったのです。

この桜田門外の変の急報を、

丁吟は「仕立正三日半限、番外」と書いた臨時特別仕立て便を出しています。いかに急な知らせであつたかということが分かります。3月3日の夜8時ごろに書いて、江戸店から京店に発信しています。その内容はそこにいたものでないといわれないような正確な内容になっています。

確かに、井伊直弼がどうなったかは書いていませんが、重大なことが起こったということがよく分かり、これは、3日半、3月7日の昼に京店に届いていました。

一方の、彦根藩の場合は、大久保小膳、高野瀬喜助という、江戸藩邸の側用人の二人が早駕籠で彦根に知らせに來たのが3月7日の夜だったのです。丁吟の知らせは、それよりも早かったということです。

3月7日の翌日に幕府の役人らが京店にやってきて、「おまえのところに早駕籠が来ただろう、急報が届いているはずだ」という尋問があつたのです。それに対して、「確かに來ましたけれども、すぐに小田荊の本宅に送りましので、内容は知りません」と言って断っています。つま

り、本当のことは言わなかったのです。全部見ているに決まっていますが、このことで、いかに迅速な情報通信網を持っていたかということが分かります。

この事件の直後に、丁吟は彦根藩に対して資金調達をしています。事件の翌朝、3月4日に彦根藩から丁吟の江戸店に対して、資金調達のために相談があるから出頭してくれと言われて、番頭の藤兵衛が元方勘定所に詰め込み、資金調達のことにあたったのです。江戸と近江の間で、献金が1万1000両、調達したお金が1万1000両、彦根藩からの預かり金を返したのが3900両、計1万5900両の資金を調達しています。

慶応元年、小田荊村の幕領化

そのときの功によって番頭藤兵衛は、二人扶持を褒美としてもらっています。このことは、この小田荊村にとっても大きな影響があり、彦根藩領地であつた小田荊村は慶応元年10月、ピンポイントで幕府に引き抜かれ、幕府領になりました。

もちろん、その前の事態があります。事件後、まず彦根藩でクーデターが起きます。文久2年(1862)8月、尊攘派の岡本半介という家老の一人がクー

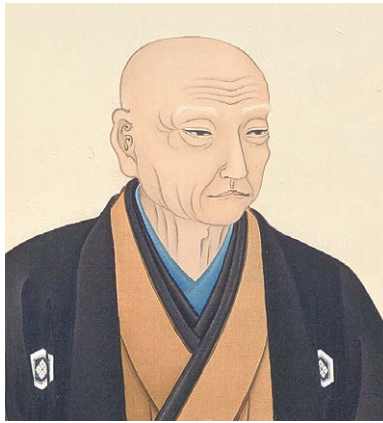


写真15 2代目小林吟右衛門(1800—1873)

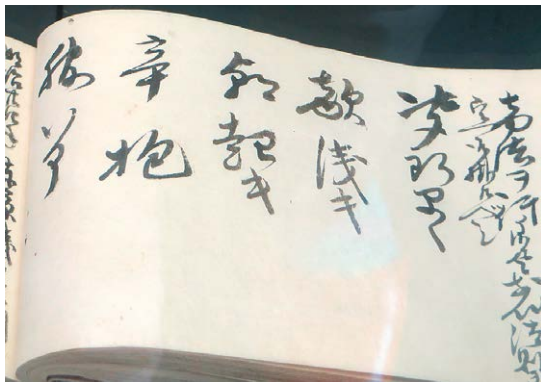


写真16 4代目吟右衛門の書

商法を行うときには
法則を定めて
とりかかるべし
決断早く
欲浅き
朝起き
辛抱
腹八分

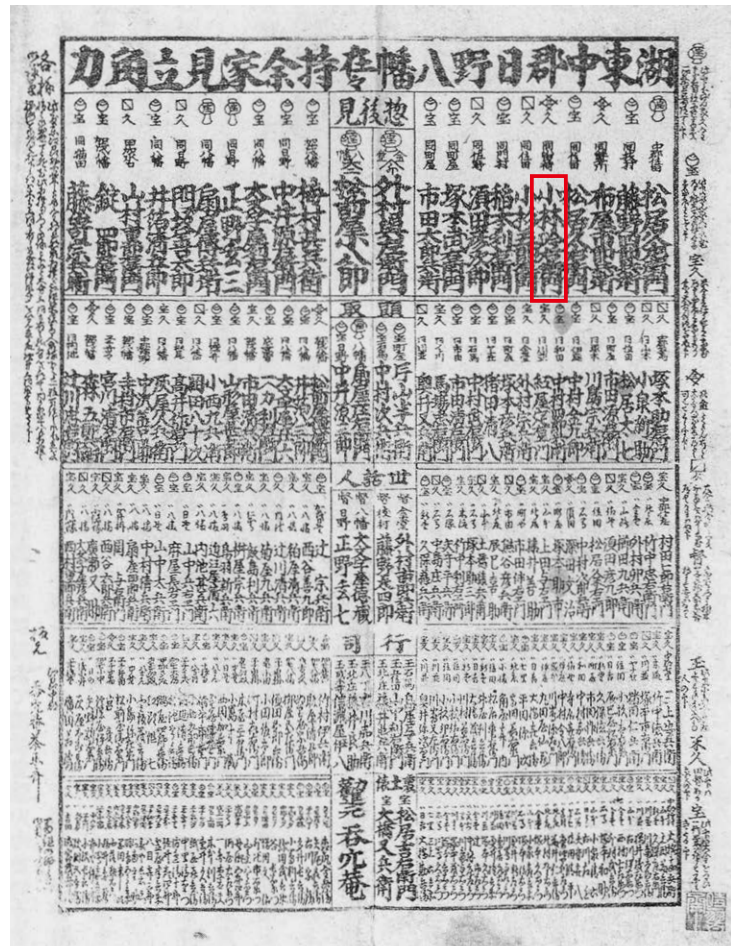


写真14 近江商人の番付(近江商人郷土館蔵)

「湖東中郡日野八幡在々持余家見立相撲」相撲の番付のように近江商人の財力を表している。
小林吟右衛門家は上段の5番目に位置している。

両替商伊勢藤の倒産波紋

連鎖倒産の危機 「立つ鳥後を濁さず」

デターを起こして、彦根藩の政治勢力が変わったのです。そのために、井伊直弼の側近中の側近の、長野主膳と宇津木六之丞は捕らえられて斬首です。そして、彦根藩に対しては、蒲生郡と神崎郡のうちから、10万石が取り上げられることになりました。

た。こういう前史があつて、慶応元年に小田荊村だけが幕府領になったのです。このことは、丁吟にとっては、彦根藩との関係が切れてしまうわけです。その代わり、今度は幕府からいろんな献金を求められることになってくるのです。

丁吟は、万延元年に金貨の投機で大もうけたのですが、その翌年、文久元年(1861)11月7日に大金を預けていた両替商の伊勢屋藤兵衛が倒産します。伊勢屋藤兵衛は、京都のもつとも有力な両替商の一人ですが、その伊勢屋藤兵衛がいきなり倒産したのです。純負債額が58万5464両。その中で最大の債権者は近江商人で47人、有力な近江商人のほとんどが計34万両を預けていたのです。最大が丁吟の12万両で、松居久右衛門が10万両です。

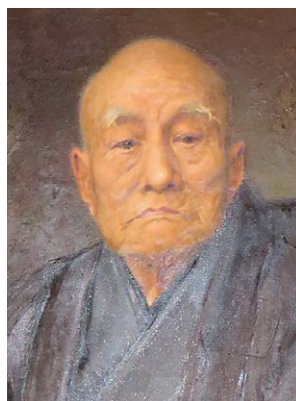
2代目小林吟右衛門の時代でしたが、非常に迅速な対応をして、ほかの両替商から資金援助を得て、共倒れの危機を脱することができました。そして大阪

「こんな大きな事件があつた後は、せっかく開いた両替商を閉鎖しなければいけない。でも、そのことによって、その後始末をきちんとすれば、立つ鳥跡を濁さずというかたちにすれば、それは世間に対していい印象を与えることになるって、カムバックもできるだろう。だから、いまはそのことをよく考えることが必要だ」と、京都から手紙で大阪の店に言っているのです。
幕末期にはこのように波乱がいっぱいありました。その一つは、和宮下向です。
和宮親子内親王は、政略結婚



写真19 4代目の洋行

明治20年（1887）4月27日から11月8日にかけて視察と機械買い付けのために海外に出向いた。当時の4代目吟右衛門は、長期にわたって沈滞していた商勢を挽回し、企業勃興の時運に乗って家業に新分野を切り開こうと、小名木川綿布株式会社（のちの富士紡績）の創設に積極的に参加していた。

写真18 5代目小林吟右衛門
(1873-1970)

小林合名株式会社（丁吟商店）の社長として大正期の舵取り役を担い、小田刈の本宅に最後まで住まいし、業務を統括していた。

写真17 4代目小林吟右衛門
(1845-1905)

綿布会社創設のため、半年間欧米各地を視察し、小名木川綿布、近江鉄道などの創設に関わる

で14代將軍の徳川家茂と結婚することになりました。そのとき和宮は満16歳です。文久元年10月20日に、京都を出発して、10月22日は守山、翌日は愛知川に宿泊しています。京都から送ってきた人が2754人、幕府が迎えに送ってきたのは2918人。彦根藩の警護人が988人、合わせたら6700人です。4カ所に分宿しています。

一方、京都では、文久3年（1863）7月24日、八幡屋卯兵衛の首が三条大橋のたもとにさらされ、その傍らに天誅続行を宣言した添え札が立てられました。ここには三条東洞院西入るの丁子屋吟三郎、室町三条上るの布屋彦太郎、同人父市次郎と書いてあります。この丁子屋吟三郎というのは、丁吟の京店の名前です。布屋彦太郎は、能登川に本宅がある近江商人阿部市郎兵衛とその父市次郎、そして大和屋庄兵衛。これら商人への天誅の理由は「諸品買いしめ、横浜、長崎へ積みくだし、夷族に相渡候に付、物価益騰貴し万民困苦に堪えず」というもので、残った4人も狙い、必ず、天誅を加えるということが書いてあるのです。

それから今度は、禁門の変（1864）が起きます。これは尊攘派と公武合体派の軍事衝突で

す。これは1日で収まったのですが、京都の中心部が焼けてしまいました。

徳川幕府の最後の慶応3年（1867）から翌年にかけて、ええじゃないか踊りというのが出てきます。慶応3年に、徳川幕府の第2次長州征討が失敗に終わり、こうした権力の空白が起きたときに、こういう社会現象が起きたのです。もう世の中のことはどうでもいいじゃないかという意味で、男性が女装し、

明治の丁吟

松方デフレ政策 鉄道、銀行、綿業、鉱山への投資

最後に、明治になってどうなったかを付け加えたいと思います。

松方デフレ以後に、近江鉄道、東京銀行（現在のみずほ銀行）、小名木川綿布（現在の富士紡）、治田鉱山（閉山）に投資していきます。4代目小林吟右衛門の時代です。

明治維新は、武士階級の間での権力の移行でした。そのときの動乱が、それ以外の階級の人たちにとっては、受難の時代だったものであり、当事者という感じはなかったのです。

女性が男装して踊り狂い、豪商や豪農の家に上がり込んでくるのです。近江商人の家、例えば川並村の塚本定右衛門家、金堂の外村与左衛門家という豪商の家でも、こういうええじゃないかの踊りの一隊が上がり込んできたのです。そこで、塚本定右衛門家では、たぶん来るだろうと分かっているから、みんな土足で上がるので、台所や居間とか座敷の畳を裏返しにして防衛したのです。

ところが、明治14年（1881）から明治19年にかけて6年間、デフレ政策がとられます。松方デフレといわれ、貨幣制度と銀行制度を確立するためだったのですが、あえて意図的にデフレ政策がとられたのです。

6年間も不況の政策がとられたわけですから、もうたまらんというので、初めて商人階級の人たちも新しい事業に手を出していきます。それは全国的な企業勃興状況でしたが、この丁吟もそのうちの一人でした。

明治34年に『時事新報』（福沢諭吉が創刊）の9月22日号が特集記事を出しています。日本全国50万円以上の資産家441

人と数えられています。滋賀県の部で載っているのは、井伊直憲(最後の彦根藩主)、伊藤忠兵衛、外村宇兵衛、塚本定右衛門、小林吟右衛門、小泉新助、浅見又藏、阿部市郎兵衛、下郷伝平

商家の願いは「子孫長久」と「家業永続への祈り」

いま申し上げた個別的なことと違って、商家の本当の願いは何かというと、子孫の長久と家業永続への祈りです。

丁吟には押込隠居の規定があつて、子孫を長久し、家業が永続することへの手段としての条文を設けているのです。そのために、陰徳善事、社会貢献をしながら、その祈りを達成しようとしたのです。

陰徳善事の中で、公的なものとして有名なものは、中井正治右衛門の瀬田の唐橋を一手で架け替えたということです。それから、外池宇兵衛は日野商人ですが、新田開発と上水道の工事を行っています。西澤真蔵(愛荘町出身)は、愛知県の枝下用水を完成させていて、水の神様とされ、神になった人です。それから、古川鉄治郎は、豊郷小学校を一手で寄付しています。そういう陰徳善事をして、家業の永続、子孫の長久を祈ったのです。

の9人です。井伊直憲を除くと、ほとんどが近江商人と言ってもいい人たちですが、古い近江商人と、新興の近江商人が出ています。これ以後が大きく分かれてくることになるのです。

日本の商家の組織原理では、家業の永続というのは利益より重視されたと言えらると思います。そのことが、多くの老舗を残してきたわけです。日本には、多数の老舗企業がありますが、それは現在の会社の企業観に影響していると思います。要するに続くということを非常に大事にしたということです。

日本の老舗企業についての、これは一つのデータです。60カ国の、200年を超える企業は8785社あると統計に出ています。日本の場合には3937社。その次がドイツの1850社、半分以上ですね。3位がイギリス、そしてフランス、オーストリア、オランダと、続きますがほとんどがヨーロッパです。こういう結果がもたらされたというのは、日本の企業というのは、世代交代しながら長く続くことに価値をおいてきたということが言えると思います。(談)

「てんびんの詩」の 主なロケ地となった 丁吟の家屋

近江商人の商家に生まれた大作少年が商いの極意を学ぶまでの課程に、思わず涙を流してしまう教育映画の名作は、小林家が主な撮影現場となった。多くの漬物石や桶などが整然と並び、食料保存庫前には砧と砧台がひっそり置かれている。砧は、木綿などの布を柔らかくしたり、皺を延ばす道具であるが、主に女性の夜なべ仕事であった。商家の女性の生活を示す写真にその様子が残る。



井伊家の菩提寺 龍潭寺と清涼寺

石田三成の居城として知られる佐和山山麓には、井伊家の菩提寺である二つの禅寺がある。その一つは臨済宗の龍潭寺、そして曹洞宗の清涼寺。近江商人郷土館見学後は、小林吟右衛門が勘定方を務めた井伊家の菩提寺を参詣した。

遠江国から分寺し、昊天和尚によって創建された龍潭寺

慶長5年(1600)、関ヶ原合戦で活躍した井伊直政が佐和山城に転封になると、井伊家発祥の遠江国の井伊谷(現在の浜松市)にある龍潭寺の昊天和尚を招いて創建されている。龍潭寺は、天平5年(733)遠江国引佐郡に行基によって開かれたと伝えられ、井伊共保が葬ら

れたことから、井伊氏の菩提寺となり、室町時代に禅宗寺院となっている。

直政の意向で創建された龍潭寺の方丈には蕉門十哲の森川許六の襖絵104面が残り、造園を学ぶ園頭科があつた寺にあさわしい池泉、枯山水の庭園が佐和山を借景として素晴らしい。

初秋には清楚な沙羅双樹が美しいことで知られるが、あいにくこの時期にはまだつぼみは固かったものの、北川宗暢住職から寺の創建や庭園の説明を受け、静寂に包まれた庭園鑑賞を楽しんだ。

毎年、4月1日にはだるま祭りが行われることから方丈には大きなだるまを見ることができ、井伊谷からの井伊氏の歴史を堪能させていただいた。



龍潭寺の庭園

2代藩主直孝が創建し、直弼が修養した清涼寺

近年改修された清涼寺は龍潭寺に隣接する曹洞宗の寺院で、大坂冬の陣で活躍した井伊家2代藩主直孝が初代藩主直政の墓所として創建し、歴代藩主の菩

提寺として栄える。存在感のある境内のタブの老木は、石田三成の重臣であつた島左近の屋敷があつた頃からのものと伝わる。当寺は常に参詣することはでき

ないのであるが、特別に拝観させていただいた。そんな無理なお願ひにも関わらず、村瀬行寛住職から、寺の創建、井伊家のことなどのご説明をいただき、その後内陣奥の井伊家代々位牌堂にまでご案内いただくことができた。

井伊家16代当主夫人の文子さんは、こよなく直弼を敬愛され、ご存命中には、毎年、直弼所蔵の名品が登場する盛大な茶会が催されていた。直弼はここで幼少の頃から修行僧とともに修養し、桜田門外の変の3年前に清涼寺から戒名を授かっている。清涼寺には歴代14名の藩主の肖像画が伝わる。



直弼の修養道場であつた清涼寺



清涼寺の村瀬行寛住職

小学生向け近江商人クイズ

「おはなし近江商人」完成

わかりやすく、楽しみながら近江商人について学習できるツールとしての「クイズ近江商人」完成後、初の公開授業開催



2022年6月10日中日新聞

三方よし研究所出前講座委員会では、子供たちに近江商人への理解を深めてもらえる工夫を検討してきましたが、このたびようやく、楽しみながら理解を深めてもらえるようなテキストが完成しました。

5月の例会では、平田委員長から会員へのお披露目があり、県内の小学校にも積極的に告知しました。ところがコロナ禍という状況もあり、手応えがなくがっかりしていました。そんな時、近江商人発祥地のひとつ五個荘小学校からのご依頼があり、五個荘小学校の4年生、6年生のみなさんにご披露しました。講師をつとめた平田委員長から当日の報告をお伝えします。

いろいろ悩みながら作成したプログラムでしたので、本当に理解してもらえるのかどうか、不安だらけでした。内部でのテスト講座では、メンバーの皆さんは大変優しく対応してくれましたが、小学生には事情が違うだろう、江戸時代の社会の状況や生活の様子が理解できるだろうか、見たこともない道具はどうして説明するかも心配でしたので、とにかく現物を用意して授業に臨みました。

2クラス合同の授業だったので100名の小学生が体育館に集まってきてくれました。皆大変お行儀がよく静かに話を聞いてくれます。クイズを絡ませ、現物の商業道具を紹介しながら話を進めたのですが、さすが、近江商人発祥地で生まれ育った五個荘の子供たちは、とてもよく理解してくれ、質問にも積極的に答えてくれました。当然ながら、日頃からの先生方のご指導や地域の方の暖かい愛情あふれるしつづけのたまものだったと思います。静かに聞き、はっきり話す、わからないことは質問するという、とても気持ちよい授業でした。何よりも「合羽」「矢立」「銭皿」「早道」などの商業道具に大いに関心を寄せてくれたことは感激しました。



この授業が、近江商人を生んだという地域の誇りを感じてもらい、自分自身の成長の糧にしてもらえれば嬉しいです。まだまだプログラムの改編も必要ですが、こうした授業を県内の多くの場所で実施できるように積極的に働きかけていこうと思っています。お気軽にお声がけください。

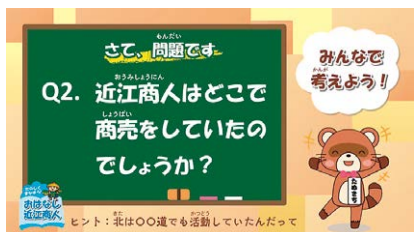
「おはなし近江商人」出前講座 ● お問い合わせ先

三方よし研究所事務局

TEL. 0749-22-0627

E-mail: office@sanpo-yoshi.com

「おはなし近江商人」より部分



特定非営利活動法人三方よし研究所
創立20周年記念式典

近江商人の叡智に学ぶ

日 時 2022年10月29日(土) 13:00開始

場 所 琵琶湖ホテル 瑠璃の間
520-0041 滋賀県大津市浜町2-40 電話: 077-524-7111

参加人数 講演・シンポジウム: 200名(参加費: 1,000円)
懇親会: 100名(参加費: 10,000円)

13:30 ~ 15:00

記念講演会

今こそ必要な「近江商人の理念」..... 講演者: 田原総一郎氏

15:20 ~ 17:00

近江商人の系譜に連なる企業家シンポジウム

近江商人が創業した企業経営者に出席いただき、創業の志を現在の企業経営にどのように反映しているかなどの討論を予定。5分程度、参加企業を映像でご紹介します。

司会進行・コーディネータ: 末永 國紀(近江商人郷土館館長・同志社大学名誉教授)

参 加 者: 権藤 浩二(小泉産業株式会社 代表取締役).....《1716年創業》
山中隆太郎(トヨタモビリティ滋賀株式会社 代表取締役).....《1831年創業》
塚本喜左衛門(ツカキグループ代表・三方よし研究所理事長).....《1867年創業》

17:30 ~ 19:00

祝 賀 会

- ▷ 映像で見る20年の歩み
- ▷ 近江商人ゆかりの酒蔵 利き酒
- ▷ 落語(桂 三風)

お申込みは
こちらから



ご参加お申込先

三方よし研究所事務局

Tel. 0749-22-0627 E-mail. office@sanpo-yoshi.net

てんびん棒

三方よし研究所が生まれて本年で20年を迎える。今や、三方よしは外国でも通じる言葉になったが、当時はまだ一般的な言葉ではなかった。1988年、滋賀県が湖国の産業興し、まちづくりに近江商人の商法や経営理念を生かすことを目的に世界あきんどフォーラムの開催を決めたことが、当研究所設立につながった。1991年、世界あきんどフォーラムは、内外の多くの著名人を集め盛大に開催され、このときを期に「三方よし」は少しは知られるようになった。その後滋賀県にAKINDO委員会が設置され、近江商人の理念に学ぶセミナーや講演会の開催をはじめ、若手経営者の育成にも腐心された。ところが10年経過後、AKINDO委員会は解散した。このとき本事業を引き継ぐ形で誕生したのが三方よし研究所だ。数年は滋賀県の支援を受けたが、今や独り立ちした活動を展開している。バブル後、失われた10年といわれるが、今や三方よしは確実に見直されてきた、この精神が当たり前になる新たな社会を目指したいものだ。